

新たな不登校が生じない取組 「未然防止」の取組

不登校が生じない魅力ある学校・学年・学級づくりの推進

【取組1】(A中学校)

1学期に全生徒を対象に「よりよい学校生活のためのアンケート」と「学校風土調査」を実施した。その結果、1年生において「学校内で誰かの役に立っている」や「この学校で、私はうまくやれていると感じる」などの自己有用感や自己肯定感を示す項目の肯定的な回答が少なかった。このことから、1年生に対し自己有用感や自己肯定感を高める取組を検討した。そこで、前述のアンケートで「どんな場面で役に立っていると感じるか」という質問の回答に「友達に教科のことを教えている(場面)」という自由記述が多かったため、これをヒントに以下の取組を実践した。

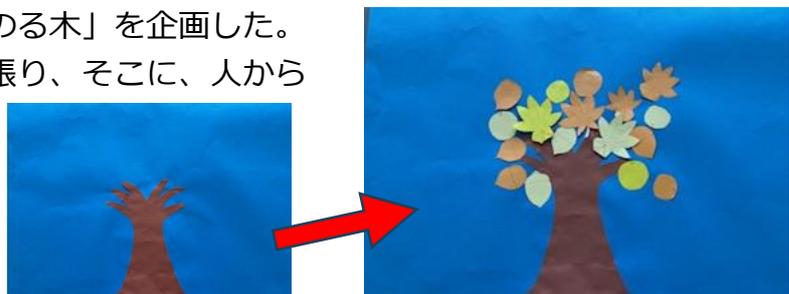
<授業内で生徒同士の「教え合い」>

各教科の教員に、授業内で生徒同士の「教え合い」を取り入れることを提案し、可能な範囲で実施した。その際に、教え合いの意義や伝え方と聞き方を生徒に伝え、安心して実施できる状態をつくった。

<幸せみのる木>

生徒同士の助け合いから自己肯定感や自己有用感を高め、親和的なきずなをつくるために、学級委員が「幸せみのる木」を企画した。

大きな木の幹の絵を教室に張り、そこに、人から教えてもらったことや、してもらってよかったことを葉の形をしたコメント用紙に記入して貼っていった。



【取組2】(B中学校)

社会科の授業において、用意された複数のテーマを班単位で分担し、さらに各班のテーマに関するものの中から自分が調べたい内容を自分で決定して調べた。それを班のメンバー同士で教え合う学習を継続的に実施している。

この学習を通して、生徒が自分の役割を果たし、自己有用感を高めることができたことにより、学校に登校して、主体的に授業に参加する意欲が高まった。

【取組3】(A中学校)

不登校対応巡回教員が「新規不登校が生じにくい魅力ある学校とは」というテーマで校内研修を行った。その中で、不登校に対する基本的な考え方だけでなく、ミニワークとして「居場所づくり」と「きずなづくり」に着目した授業づくり等について教員同士で話し合った。このワークにより、様々な経験を有する教員が意見交換を行い、不登校に対する捉え方や対応について、実践的な取組を考えることができた。

多様な学びの場を確保する取組

〔「早期支援」及び「長期化への対応」の取組〕の推進

支援会議（B中学校）

週に1回、管理職・各学年の教員・SC・SSW・不登校対応巡回教員が参加し、不登校の生徒について支援の方向性を話し合っている。また、校内別室での支援については、利用している生徒の様子や支援内容及び支援体制、新規の校内別室を利用する生徒について話し合い、改善点があれば早期に対応している。

アウトリーチによる支援（A中学校）

傷病以外の理由で連続6日以上欠席が続く生徒に対し、担任が家庭訪問をして、生徒と面会する取組をしている。また、不登校傾向の生徒に対して、担任が生徒本人と登校できそうな時間を決めて支援したり、生徒からの希望があれば担任や不登校対応巡回教員が家庭訪問して、登校支援を行ったりしている。

校内別室における支援（C中学校）

校内の一室を校内別室として活用している。個別の学習ブースと談話スペース、靴を脱いでくつろげる畳スペースがある。利用生徒は、登校後に支援員と一日の過ごし方について時間割を見て自分で選択・決定する。支援員はその計画が実行できるように、職員室と連携をとりながら生徒の様子を見守っている。できるだけ教員が校内別室に来室し、利用生徒とコミュニケーションを取ることで孤立感を感じさせないようにしている。また、週に1回はSCと面談をすることで心のケアを行っている。



デジタル機器を活用した支援（C中学校）

教室の授業を一人1台端末でオンライン配信することで、校内別室や家庭で視聴できるようにしている。これにより、学校や学級とのつながりを継続できるように支援している。



関係機関との連携（B中学校）

SC・SSWが校内で行われる各種会議に参加している。また、教育委員会が設置運営している学校外の学びの場や、NPOが運営している子どもの居場所づくり事業と連携し、生徒の見守り体制を強化している。

今後はフリースクールとの連携も図っていく。

成果

学校内外に生徒の状況に応じた相談場所を設置し、情報の把握や共有を行い、個に応じた支援ができたため、どこにもつながっていない生徒が0となった。

課題

不登校傾向の生徒が校内別室に登校できることが増えている。当該生徒の希望に応じて教室復帰に向けた支援を実施する。